入選作品

長靴をはいた猫

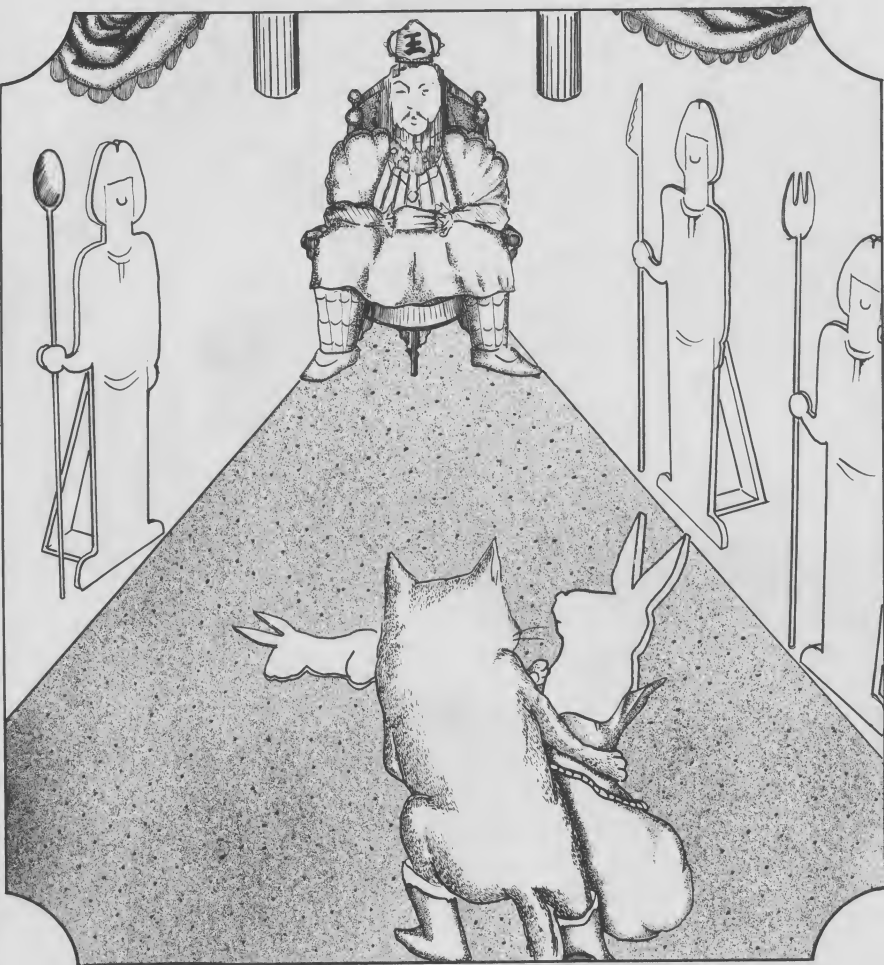
清水　聰

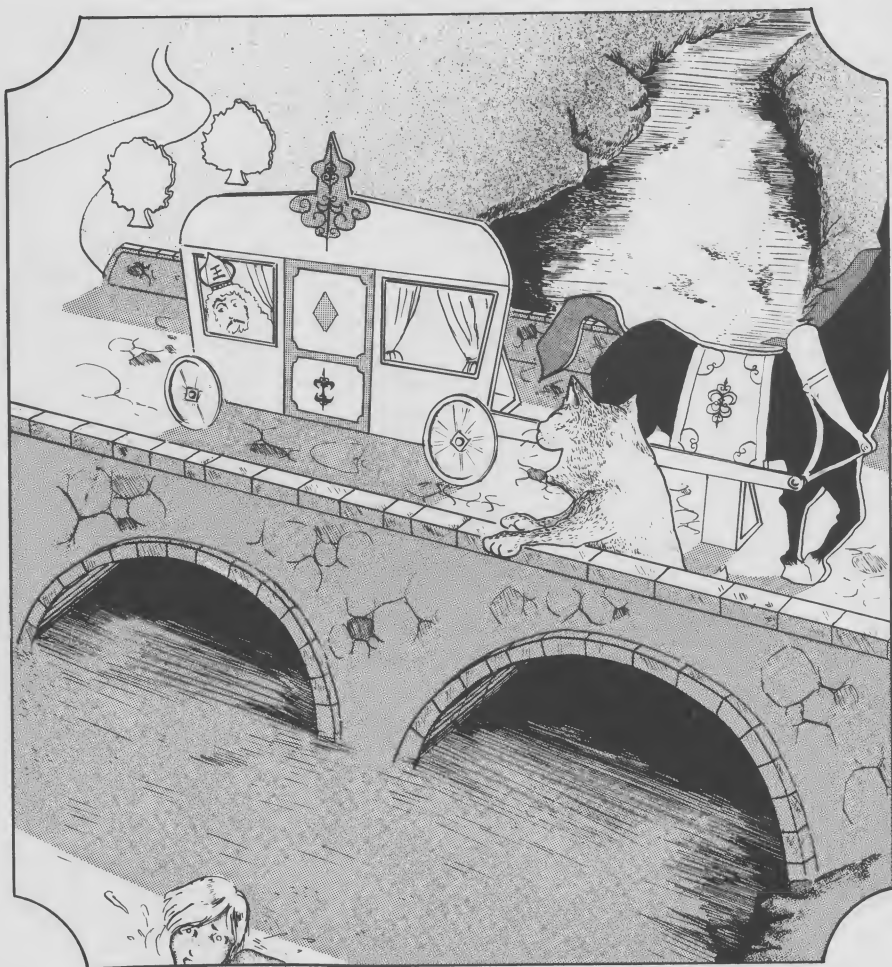
昭和33年7月30日、浦和市に生れる。成蹊大学文学部卒。「デビュー作「長靴をはいた猫」('79・4月号）現在、フリーイラストレーター、ビデオプロデューサー。

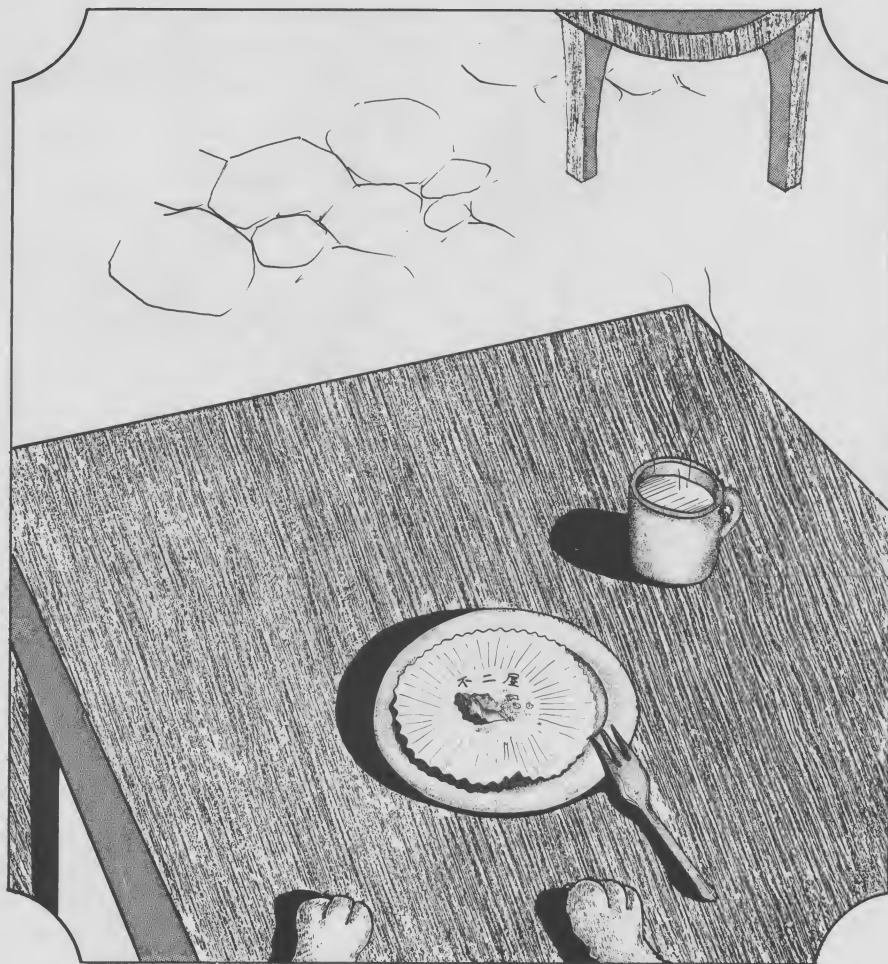
有名な話ではありますが、或粉碾きが死んで、その三男である若者は、遺産に猫を一匹しか分けてもらえませんでした。

正直のところ、若者は失望して、まあ皮はジパング（日本国）へでも三味線（ジャパニーズマンドリン）の材料として輸出し、肉は亜米利加国のＮＥＫＯＤＯＮＡＬＤの半馬鹿（ハンバーガー）へ売りつけようなどと思案しておりますと、当の猫が唐突に意見を挾んだもので吃驚（びっくり）してしまいました。

猫の主張（オピニオン）によれば若者は、猫に長靴（ブーツ）と麻の袋を一つ買い与えるべきであり、さすれば必ずや彼には幸運が訪れるであろうというのです。若者はたいへん意志の弱い性格でしたので、ついついその気になりました。

大人の男の人は、みんなわかると思うけれど、長続き、というのは、けっこう大変なのです。とにかくガロはしつっこく元気でガンバって下さい。

猫は長靴と袋を手に入れますと、森へ行き鷓鴣や兎を袋で捕えまして、鹿馬羅侯爵（若者をかってにそう呼んだのですが）からと申して、王様の所へ行きそれを献上いたしましたので、王様はたいへん喜ばれました。

そうするうちに猫は、ある日王様が世界中で一番美しいお姫様と御一緒に、川べりの方へいらっしゃるのを知りました。

猫に川の中につかっているよう教わりましたので若者がいわれた通りにしますと、そこへ王様一行の馬車が通りがかりました。
そこで、猫は王様に助けを求めて、主人がおぼれておりますうちに泥棒が来て服を取って行ってしまいました、と訴えました。
王様は、見なれた猫の話を聞いて若者を助け上げ、一番りっぱな服を用意なさいました。
服を着ると若者はたいそう美しく見えたので、王様はたいへんお気に入りになって、一緒に馬車の散歩をすることを御命じになりました。

猫は一行より先に一人でまいりました。
そこには、その周辺一帯を領地にしている大金持ちで人食いの怪物（モンスター）
の住む城がありました。猫はそこへ入って行きました。

「ところで」猫は怪物に申しました。「貴方は、聞くところによると色々なものに、たとえばゾウだとか、ライオンだとかネズミだとかに変身出来るそうですが、まさかチイズケエキになれないでしょう?」

怪物はたいへん人が良かったので、一回でチイズケエキになってみせてくれました。それで猫は一口にパクリ・・・・

するとちょうど王様の一行が城の前に着きました。猫が出向かえて王様に申しました。「これは王様、鹿馬羅侯爵のお城へようこそ」王様は、こんなりっぱな城を見たことがなかったので、たいそう驚かれました。
猫が一行を大広間に案内いたしました。

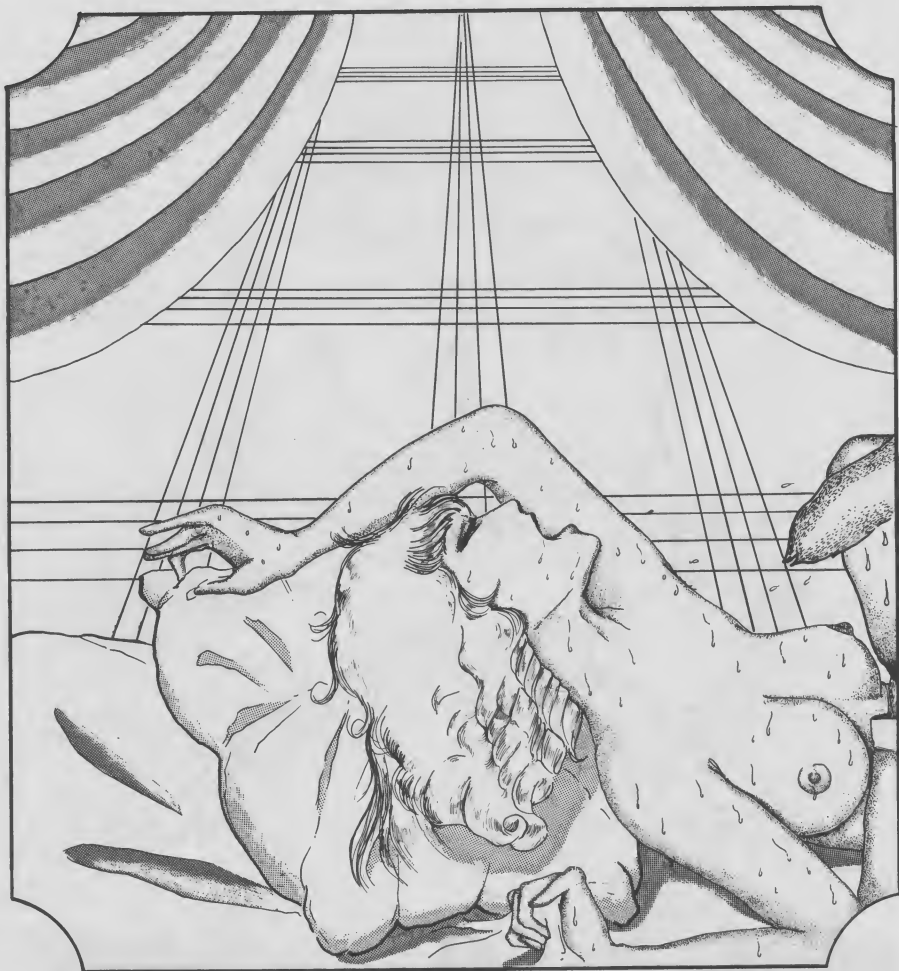
王様は、侯爵がたいそう財産をもっているのを見て、決心を固めてついにおっしゃいました。

「どうじゃね侯爵、わっ、わしと結婚してくれんか」えっ

そうです、王様はさきほど助け上げた時、ちらりと見た若者の美しい裸のおしりが忘れられなかったのでした。

若者は、なにごとも昔話の様にはうまく行かないものだとあきらめて王様の申し出を受け入れましたので、二人は式を上げに出かけ、城には、欲求不満のお姫様とネコが残されました。

二人だけになりますと、猫はすぐに美しいお姫様に言いよって、下品な言葉で申しました。「やっと二人になれたじゃねえか、ようキレエなネエチャン、俺は初めからあんたと〇〇〇コしたかったんだぜ、なあいいだろ一発やらせろよ、へるもんじゃないし、いいだろ‥‥云々」

美しいお姫様は、始めは形だけ抵抗いたしましたが、実はたいへん好き者でしたので、もうパンティがぐちゃぐちゃのベチョベチョに濡れておりました。

ドレスを全部脱いでベットに横になります、猫はたいへん上手に舌を使いましたので、何度ものぼりつめ、
「アアっ、いいわ、もっとあっ、すてき、いくわ、もっともっと！やってやって」等々そのほか、童話ではとても書けないような下品な言葉をたくさんおっしゃいました。
けれども、準備がととのい猫が挿入しようとした時です、お姫様は我に帰って、「ああっ、だめよっ、お願い、そのままじゃダメだわ、わかるでしょ、今日やばいのよ、あたし。」

おわり